

第二章 滿洲事變以後滿洲に於ける作戰

才一節 滿洲事變

才一款 滿洲に於ける日華兩軍の兵力

平時に於ける日本の駐滿部隊は駐劄師団一箇、獨立守備隊一箇一六箇大隊一及重砲兵大隊一箇にして其の兵員約一〇四〇〇であり事變發生當時に於ける兵力配置は左の如くであつた。

関東軍司令部

駐劄師団は才二師団司令部

歩兵才三旅団司令部及歩兵才四聯隊

歩兵才二十九聯隊

歩兵才十五旅団司令部及歩兵才十六聯隊

歩兵才三十聯隊

騎兵才二聯隊

野砲兵才二聯隊

旅 順

遼 陽

長 春

奉 天

遼 陽

旅 順

公 嶺

海 城

丁兵才二大隊  
獨立守備隊司令部

才一大隊

才二大隊

才三大隊

才四大隊

才五大隊

才六大隊

旅順重砲兵大隊

中國側に於ては奉天軍を主力として滿洲に正程軍約二五〇〇〇を有し暴變發生當時張學良は約一〇〇〇〇の兵力を北京及天津附近に駐屯せしめ彼自ら北京に在つて之を統率して居た。従つて暴變當時滿洲の奉天軍兵力は一三〇〇〇〇乃至一四〇〇〇〇にして其の兵力配置は左の如くであつた。

奉天  
奉天  
公主嶺  
奉天  
大石橋  
連山関  
鉄嶺  
鞍山  
旅順

奉天省方面

約四万五千

吉林省方面

約五万五千

黒龍江省方面

約二万五千

熱河省方面

約一万五千

右の内事変発生當時日本軍に直ちに對抗し得る兵力は奉天、吉林兩省方面の兵力約一〇万にして日本軍に比し約一〇倍である。

才二款 奉天、長春、吉林の占領及洮昂線附近の戦斗

九月十八日夜柳条溝附近に於て日華兩軍衝突したとの報告を旅順に於て受領した關東軍司令官は軍本来の任務と軍の自衛上の必要とに基いて一軍は直ちに奉天以南滿鉄線の掩護を確保し作戰の自由を確保すると共に速かに主力を奉天に集結して該地の敵を撃破し以て東四省の中樞を制するに決し之に基き夫々部署を行い軍司令部は十九日旅順より奉天に移つた。各部隊は軍の部署に基いて夫々左の如く行動した。

一 奉天方面に於ては十九日日本軍奉天城門を陥れ東大營を占領した。

遼陽に在つた才二師団の各部隊は十九日奉天に集中した。

五八

三長奉方面に於ては十九日寛城子を占領同日一二〇〇迄に南嶺を陥れ二十日〇七〇〇交戦の後昌図を占領した。

三吉林方面 才二師団は満鉄の側面掩護並に居留民保護の目的を以て二十一日混成約一師団を吉林方面に派遣した。同旅団は吉長線に依り同地に向い大なる戦斗なく同日夕吉林に入城し吉林軍主力の武装を解除した。

朝鮮軍司令官は事変発生後関東軍の増援請求に対し独断を以て混成才三十九旅団を満鮮国境を越えて派遣した。同旅団は二十一日夜奉天に到着した。

参謀本部は滿洲に於ける日本軍の軍事行動の緊急処置一段落を告ぐるや九月二十三日関東軍の配置を現状の儘とすることとし之が為吉林城内外奉天城内の駐屯部隊は當分撤退しないことを決定した。又関東軍司令官は此の機会に聲明を以て滿洲に於ける旧勢力を排すべき日本軍

の意向を明示し諸隊は之に基き滿洲の治安維持に努め鉄道整備、兵匪の討伐を実施した。

洮昂鉄道沿線方面に於ては洮遼鎮守使張海鵬と黒龍省主席代理馬占山との關係日々惡化し馬占山は十月下旬以來軍主力を嫩江河畔に集中して勢威を示し張海鵬は黒龍省を占據せんとする宿望を遂げんとして十月中旬其の先遣部隊を以て嫩江右岸に達した。此に於て馬占山は張の北上を阻止せんが為十月十五日嫩江の鉄道橋一昂々溪の南方約五〇軒を爆破した。日本軍は馬占山に對して十一月三日迄に之が修理を完了すべきを要求したが彼は言を左右にして之を実施せず、日本軍は已むを得ず滴鉄をして其の修理を行はしむるに決し之が掩護の為十月三十日嫩江支隊を派遣した。

支隊は十一月二日嫩江河岸に到着し四日その一部大興に向い前進を起すや馬占山軍は突如不法射撃を加え、茲にはしなくも彼等の戰鬥開始せられた。馬占山軍の兵力は總計約五千にして大興附近に在るものは

歩兵約千二百、砲數十門であつた。軍司令官は兵力を増加し六日夜  
大興の敵陣地を占領した。

馬占山軍は爾後兵力を増加し十一月十七日兵力一万二、三千、砲約三〇門  
を以て嫩江支隊を攻撃し來つた。此に於て才二師団は十八日扈曉より  
攻勢に転じ之を撃破して十九日齊々哈爾の龍江驛を占領し齊々哈爾に  
入城した。

以下滿洲に於ける中国軍は日本軍の爲若干の打撃を受けたが全滿洲に  
浸透した積極抗日の奔流は當時の僅少なる兵力一駐劄師団一箇と朝鮮  
軍より増援せる混成旅団一箇を以て偃き止むべくもあらず、事變の解  
決は前途暗澹たるものであつたので中央部は關東軍に逐次兵力の増加  
を図つた。即ち十一月十一日には混成才八旅団に、十二月七日には混  
成才四旅団に夫々滿洲派遣を命じ、十二月下旬には才二十師団を派遣  
する如く処置した。

張学良は錦州附近に假政府を置き共匪、馬賊、便衣隊を操縦し奉天其

の他満鉄沿線要地に此等を潜入せしめて治安の攪亂を策し日本軍の行動に多大の妨害を興えた。

奉天軍の大部は西に遁れて錦州の假政府に走り一九三一年暮頃には錦州方面に正規軍約五千、別動隊約三万、義勇軍約五万、匪賊を合して其の數一一万を下らざる兵力を擁するに至つた。

關東軍は假政府軍に對し大討伐を開始するに決し才二師団を十二月二十七日遼陽出發、營口に向はしめ才二十師団を二十九日京奉線方面より錦州に向はしめた。才二師団の先頭部隊は三十日午後敵を擊退しつづ溝帮子を占領し才二十師団の才三十九旅団は同日打虎山を占領した。この進攻を知りたる張學良は三十日午後錦州軍に對し關内に撤退すべきを命じ錦州は大混亂に陥つた。日本軍歩兵才四十旅団はこの機に乗じ兵匪を擊破して錦州を占領した。

#### 才三旅 哈爾濱方面の戦斗

滿洲軍變動著して程なく張學良一派の東北軍政權に屬する主要人物は

四散逃避し各省は逐次独立して議政逐次更生せられ且日本軍の各方面  
 の刺匪が錦州假政府襲撃以來順に従進し、一九三二年二月十八日新滿  
 洲の独立を宣言し二十五日新國家の組織大綱を発表するに至つた。

此の頃新滿洲國成立の議起るや吉林軍の將領丁超、李杜之に反對して  
 敵愾行動に出で新政府側の吉林軍と哈爾濱附近に於て衝突した。この  
 衝突は一月二十七日以來繰返され爲に哈爾濱は混亂に陥つた。此の情  
 勢を見た日本軍は反吉林軍討伐の爲に出動するに決し才二師団は二月三  
 日夕刻三姓屯一哈爾濱南方二四軒一南側に到達した。師団主力は五日  
 朝より攻撃を開始し直に反吉林軍を潰走せしめて同日哈爾濱に入城し  
 茲に哈爾濱附近の治安が回復した。此の反吉林軍の掃蕩と遼西の錦州  
 攻略とは滿洲國建設の氣運を著しく高めることとなつた。

#### 才四款 熱河省及華北の作戰

一九三二年一月末上海事件発生し二月十九日より才九師団及混成才二  
 十四旅団を以て戰鬥を開始し更に才十一、才十四師団の派遣に依り三



月初旬戰鬥局を結んだ。

日本參謀本部は滿洲國の治安促進の爲本年四月上旬才八、才十師団を滿洲に派遣し前年派遣せる才四、才八混成旅団を夫々原所屬に復歸せしむ一すると共に才二十師団を歸還せしめた。上海事件の爲派遣せられありし才十四師団を四月末滿洲に転用するの外六月には騎兵才一旅団、九月には騎兵才四旅団及混成才十四旅団を滿洲に派遣した。尙駐劄師団たる才二師団は才六師団と交代した。斯くて一九三二年十二月には滿洲國內に在る日本軍の兵團數は師団四箇、混成旅団三箇、騎兵旅団二箇となつた。

熱河省主席湯玉麟は初め滿洲國に忠誠を誓つたが陰に滿洲と中國との間に介在して中立國の形を採らんとし不離不即の態度を持し一方張學良に対しては抗日の志を同うするものなる意志を表示し張の指導する義勇軍を熱河省に入れ遼西地方の擾亂の根據地たらしめた。又一九三二年末には張學良の正旗軍熱河省に進入し湯玉麟は反滿決意をなした

六四  
 為熱河の情勢彌々險惡となつた。依つて滿洲國は日国内の禍根を一掃する為熱河討伐を決行するに決し關東軍は之を援助して作戰に参加した。

當時熱河省内の反滿軍は其の兵力二万五千を算し其の一部を熱河省の東境附近に設置し主力を赤峰、凌源、乾溝鎮に駐營して居た。日本は滿洲國軍と密接なる連絡を保ち一九三三年二月下旬から各方面とも行動を開始し才八、才六師団の各部隊の迅速なる機動に依り三月二日赤峰を、同日日承德を占領し十日前後には長城線を占領した。

爾後日本軍は長城線を守つて國內に進出しなかつたが中國軍は三月中旬から長城線の一帯に兵力を増加し積極的に熱河省の南境に逆襲するのみならず熱河省の西境多倫附近から我が側面を覬覦する等熱河の邊境は一日の平和をも見ることが出来ない状態であつた。此に於て關東軍は意を決して速かに長城線近くにいる敵の逆襲根據を衰除する目的を以て四月十日松遼より一齊に攻撃を開始し同十五日前後中國軍を撃

河河畔に撃退して所期の目的を達し同月二十四日長城線に歸還した。日本軍が長城線に歸還するや中国軍は再び我に尾し樂河を越えて前進し挑戦的態度益々濃厚となり或は熱河省に進入し来るものさえ生ずるに至つたので關東軍は再び立つて之に一大痛撃を加うるに決し五月七日より再び行動を開始し同月二十日前後概ね薊河の線に進出し北平、天津を指呼の間に收め得るに至つた。

此に於て中國側は正式に軍使を密雲に送つて停戰交渉を提議し三十一日所謂塘沽協定成立するに至つて茲に滿洲事變の終結を見た。

才二節 ソ連の対日参戦一挿図才六参照一

才一款 ソ連参戦前の状況

ソ連は一九四五年初頭より具体的対日参戦の準備に著手したものの如く二月頃には兵力の東送を開始し四月上旬日ソ不可侵条約を廢棄するに至つた。一九四四年十二月末に於ける極東ソ軍の兵力は狙撃師團一

九箇、同旅団若干、騎兵師団二箇、飛行師団約二四箇、（総人員約七〇万、飛行機約一五〇〇、戦車約一〇〇〇）と判断せられていたが歐ソ兵力の東送により急速に増加し五、六月頃には西伯利鉄道の平時状態を以てする輸送力の最大限に達し此の状態を以て推移せば八月末頃迄には彼の対日参戦の為の所要戦力に達し得べしと判断せられた。以上極東ソ軍増強に対する日本大本營の判断左表の如し。

六六

時 期 区	兵 員 数	飛 行 機 数	戦 車 数
一九四四年 末	七〇〇〇〇〇	一、五〇〇	一、〇〇〇
一九四五年一月末	七五〇〇〇〇	一、七〇〇	一、〇〇〇
四月末	八五〇〇〇〇	三、五〇〇	一、三〇〇
五月末	一、〇三〇〇〇〇	四、五〇〇	二、〇〇〇
六月末	一、三〇〇〇〇〇	五、六〇〇	三、〇〇〇
分上旬	一、六〇〇〇〇〇	六、五〇〇	四、五〇〇

日本軍は南方方面戦局の悪化に伴い一九四四年、一九四五年に亘り関東軍より多数の兵力を抽出し一九四五年六月に於ける関東軍の兵力は師団二四箇、独立混成旅団九箇及飛行団、飛行戦隊、飛行中隊各一箇を算するも教育訓練不十分なる上資材の不足甚しく戦力の低下著しいものがあつた。

関東軍は従来滿洲国防禦任務達成の為攻勢作戦を以て対処するの作戦計畫を樹てありしも一九四四年九月十八日以降國境地帯に於ける全面持久作戦方針に移行し一九四五年五月三十日以降南滿の確保を主体とする持久作戦計畫に変更した。

ソ連参戦直前に於ける関東軍兵力配置の概要左表の如し。

才	關東軍直屬	師	獨立混成旅団	國境警備隊	戦車旅団	機動旅団
直						
屬						
三						
122D						
134D						
133D						
一						
一						
(教導)						
TKB						
六七						

1220

計	才 三 十 四 重	才 四 重	才 三 方 面 重			才 一 方 面 重	
			才 四 十 四 重	才 三 十 重	直 屬	才 五 重	才 三 重
二 四	二 ( 39D 137D )	三 ( 119D 128D 149D )	三 ( 39D 107D 117D )	四 ( 39D 125D 138D 148D )	二 ( 108D 136D )	三 ( 124D 126D 135D )	四 ( 79D 112D 127D 128D )
	一 ( 133BS )	四 ( 80BS 131BS 135BS 136BS )			三 ( 79BS 130BS 134BS )		一 ( 132BS )
九							
一						一 ( 才五国境 守備隊 )	
三			一 ( 3TKB )		一 ( 1TKB )		
一							

六八

0273

## 才二款 作戰経過の概要

才一 關東軍總司令官の作戰指導

## 一、ソ連參戰當時の状況

一九四五年八月九日〇〇〇〇時東京、綏芬河方面のソ連攻勢を開始し〇一三〇時東京は空襲を受けた。此に於て關東軍は直にその指揮下部隊に対し侵入せる敵の攻撃を排除しつつ速かに全面開戦を準備すべきを命ず。又才二航空軍に対しては「先づ西正面就中白城子、鄭家屯方面に突進する敵機甲部隊を聚めて攻撃し其の前進を遲滞せしめ東西兩正面の敵進入状況の戰略偵察を行い且才一、才三方面軍及才四軍に対し直協機を配属すべき」を命ずると共に各軍作戰地域内に在る關東軍直轄兵站部隊及補給廠を各軍に配属した。

一註一 才二航空軍の兵力は飛行戰隊は尠きも教育飛行団等の飛行機を合し約一〇〇〇機を有す。

八月九日關東軍總司令官は左の要旨の大陸命を受領した。

1. ソ連は対日宣戦を布告し九月〇〇〇以降日ソ及滿ソ國境方面諸

所に於て戰鬥行動を開始せるも其後未だ大ならず。

2. 大本營は國境方面所在の兵力を以て敵の進攻を破挫しつつ速かに

全面的對ソ作戰の発動を準備せんとす。

3. 才十七方面軍は防衛軍の戰鬥序列に入るべし。

隷屬轉移の時機は八月十日〇六〇〇とす。

4. 関東軍總司令官は差當り國境方面所在の兵力を以て敵の進攻を破

挫しつつ速かに全面的對ソ作戰の発動を準備すべし。

右作戰の為準據すべき要綱左の如し。

関東軍は主作戰を對ソ作戰に指向し日本本土、朝鮮を保衛する

如く作戰す此の間南鮮方面に於ては最小限の兵力を以て米軍の

來攻に備う。

5. 支那派遣軍總司令官は速かに一部兵力及軍需品を南滿方面に転用

し得る如く準備すると共にソ軍の來攻に方りては所在の兵力を以



て之を撃推すべし。

6. 関東軍と支那派遣軍との作戦地域左の如し。

山海関—大城子—タリ湖東端—ユクジュール廟

線は支那派遣軍に属す。

右命令と同時に大本營は左の兵力、軍需品を中国方面より南滿方面に転用すべきを指示した。

一軍司令部 約六箇師団 約六箇旅団

弾薬約六箇師団分、其の他一部資材

三西正面作戦要領の変更

関東軍作戦計畫に於ける西正面作戦要領は各兵団をして予想せらるる敵作戦路上の要點—主として都市、村落、地障等—を占領せしめ且遊撃據点を縦横に配置し敵機甲部隊の突進に対しては前後左右より不断且廣範なる遊撃戦を行い航空攻撃と相俟つて其の前進を遲滞せしむるに在つた。

右計畫に對し才三方面軍司令官は左の理由に依り連京鐵道沿線に會  
 戰を指導せんとし獨斷之に關する処置を採ると共にこの意見を關東  
 軍總司令官に具申した。即ち

「才四十四軍の主力をなす才六十三、才百十七師團は中國方面より  
 轉進直務にしあり遊撃戰準備は殆んど実施して居ない。従つて斯か  
 る條件の下に大海の如き廣漠地に兵力を配置するも兵力の逐次使  
 用となり各個擊破を受くるのみで成果を期待することが出来ない。  
 故に此等前方地域の兵團を速かに連京鐵道沿線一主力奉天、一部  
 新京一に集結し敵の後方補給線の伸び切つた時機に反撃するを可  
 とする。右見地に基き才三方面軍司令官は十日朝才四十四軍に對  
 し連京鐵道沿線に後退する如く獨斷命令した。」

關東軍總司令部に於ては十日幕僚會議を開き才三方面軍の処置を研  
 究した。才三方面軍司令官の採つた策案は必ずしも當を得たものではなかつたが既に後退を實施しつつあるので処置の変更が大なる混亂に陥

らしむべきを認めこれを認容することとなつた。

### 三 關東軍總司令部の通化移転決定

日ソ開戦の場合總司令部を適時通化に移動せしむる件は既定の計畫にして才三方面軍司令官の連京鉄道沿線会戦の構想に依り新京附近は才一線戰場となるべく一方西正面の敵機甲部隊の突進速度予想の外早く關東軍の判断に依れば敵は十四、五日頃には新京に到達すべき状況なりしを以て八月十一日總司令部を予定の如く通化に移動するに決し幕僚以上及所屬の人馬を除きその他は十二日鉄道輸送に依り通化に到らしむることとした。

十日夜滿洲國皇帝は特別列車で臨江に向い出發した。

### 四 才三方面軍の指導

關東軍總司令官は才三方面軍司令官が才四十四軍を後退せしめたことに応じて認可を與へた所であつたが才三方面軍の全力を以てする奉天附近決戦は爾後の關東軍全般の作戰構想を根底より覆へずに至

七三

るを憂慮し方面軍司令官の再考を求めた。八月十四日同方面軍司令官は陝東軍總司令官の指導に基き決心を変更し之による作戰指導の新計畫を立案したが実行に至らずして終戦となつた。

#### 五才四軍の指導

才三方面軍の連京鉄道沿線に於ける決戦構想により今や主戰場は新京、奉天地区に予想せられ當初梅河口に在りて反響兵団の性格を有しありし才三十軍司令部は八月十二日既に新京に進出し新京防衛に専念するに至つた。

一方才四軍方面の敵の進出比較的緩なるに反し西部方面の敵の進出急速にして滿洲中樞部に於ける反響態勢と今後に於ける複郭地帯作戰態勢とを速かに確立するを要するに至つたので既に哈爾濱に向い後退を命じた才四軍に対し更に梅河口に向い後退すべきを命じた。

#### 其二 才一方面軍一東正面一作戰經過の概要

ノ軍は八月九日〇一〇〇過水流峰、五家子、春化、白刀山子及東寧附

近及綏芬河、雙月台、十文字、青弧嶺廟、半截河及虎頭附近を突破侵入した。水流峰附近を瀧過した敵は慶興、大橋を経て北鮮に前進し、は琿春を経て遂次図們方向に進出し、春化附近に侵入せる敵の一部は杜荒子、金蒼方向に前進し綏芬河、牡丹江道に沿う敵の兵力は最も強大であつて其の前進最も迅速であつた。

日本軍の各兵団は順調に陣地配備に就き敵の前進を阻止した。

松花江沿岸の才百三十四師団は松花江に沿うて前進する一部の敵に対し戦闘を交へつつ佳木斯附近を撤し方正方面に移動した。

各正面の陣地既設陣地に在つた部隊は各々克く奮戦して敵の前進を妨害しつつ敵情を報告したが其の後連絡絶え状況不明となつた。

八月十日才五軍方面に於ける敵は十日夕下城子、八面通、鶏寧の線に進出し特に才五軍正面の賚綏鉄道沿線の才百二十四師団正面の状況樂觀を許さず、才五軍司令官は才百二十六、才百三十二兩師団をして一部を現陣地に残置し主力を以て掖河に向い転進せしめたが其の転進は

敵の一部に阻止せられて意の如くならず、才三軍方面に於ては團們周  
邊地帯で敵の前進を阻止した。

八月十一日方面軍最右翼正面に於ては羅津野塞守備隊は敵の壓迫を受  
け逐次庄山方面に後退した。東寧南方附近より越境して尙島方面に前  
進中の敵機甲部隊に對し尙島北方地区に於て大なる損害を與へて之を  
撃退した。

才三軍主力は團們及彈春西方地区にて健斗し方面軍右翼の樞軸を堅持  
した才三軍と才五軍との中間に在る才百二十八師団正面では有力なる  
敵戦車兵団が十三日夕狙撃兵団と相前後して老黒山に侵入し十四日未  
明より羅子溝附近の日本軍陣地を猛攻し日本軍亦玉碎を題して防戦し  
たが同日夕刻頃には陣地の保持困難となり同師団は樺皮甸子附近の才  
二線陣地に移した。十六日再び優勢なる敵攻撃し来り之と交戦中終  
戦となつた。同師団の指揮下に入つた独立混成才百三十二旅団は大城  
敷に陣地を占領していたが十六日穆稜方向より南下した一部の敵戦車

部隊と交戦し之を潰走せしめた。

才五軍正面に在りては資綏鉄道に沿い前進した二衛師団を下らない敵機甲部隊十一日夕暮後に達し十二日払曉より同地西方台上の日本軍陣地に対し猛烈なる砲撃を開始した。同地にあつた才百二十四師団は陣地を突破せられ同日敵は磨刀石前面に達した。十三日主陣地突破口の北方小豆山附近に在りし砲兵陣地に対する敵の攻撃は猛烈を極め砲兵聯隊長以下同地にあつた将兵の大部火砲と運命を共にし同日夕同地は敵手に歸した。

磨刀石附近に配置していた幹部候補者隊及才百三十五師団の転進部隊は十二日夕以後敵機甲部隊に対し死斗を反復し其の前進を阻止した。才五軍司令官は前線の状況に鑑み掖河附近に收縮せる陣地を占領し牡丹江以東の地区に於て更に敵の戦力を破挫せんとし十一日夕所墜の処置を採つた。十三日夕磨刀石附近の陣地突破せられ敵は同日夕以後引続き英基屯、四道嶺、標高三七一、樺林南方高地に亘る重の新陣地に

七七

対し攻撃を実施し十四日發河附近才百二十六師団主力陣地を蹂躪し同  
 師団の砲兵全滅し才五軍司令官以下全員明日中に牡丹江以東に於て  
 玉碎を覚悟するに至つた。不通なりし電話開通し十四日夕に至り此の  
 状況を承知した才一方面軍司令官は左記要旨の命令を下達した。

0283

1. 才一方面軍は敦化周邊地区を復讐として長期持久を策す。  
 2. 才五軍は成るべく永く牡丹江以東の陣地を確保するに努め止むを  
 得ざるに至れば為し得る限り多くの兵力を繰め敦化附近又は横道  
 河子附近に後退すべし。

此の向才百三十二師団に対し輸送力の主力を利用して興隆、石頭地区  
 に於ける直轄部隊の爲の軍需品就中燃料彈藥等の後送を命ずると共に  
 鏡泊湖陣地に據り敵の戦力を破掃し所要に應じ才五軍主力の収容に  
 任せしめた。

終戦時に於ける才一方面軍の状況左の如し。

終戦時に於て才三軍主力方面は会寧、図們、琿春西方高地線を才百



二十八師団は樺皮甸子附近を確保した。

才五軍主力は横道河子附近に、才百二十四師団は東京城附近に位置した。

才百三十四師団は方正附近に兵力を集結した。

才百二十二師団は鏡泊湖附近、才百三十九師団は教化附近に位置した。

### 其の三 才三方面軍（西正面）作戦経過の概要

八月九日西部国境方面では満洲里、林西間に於て敵大兵団国境を突破し満洲国内に侵入したるものの如く其の機械化兵団の主力は日本軍の配備なき阿爾山、林西の中間地区方面より侵入し十日には国境と饒泉との中間附近に、十一日には饒泉に進出したが其の参同地に停止して前進の模様がなない。才四十四師団は才百十七師団をして一部の兵力を日城子に置き敵の前進を遅滞せしめ主力は方面軍命令に基き奉天附近に後進した。阿爾山方面に在りては九日戦意を伴う約一營師団の敵陣地前に展開し

0282

0284

十日其の兵力二箇師団となり、九日又戦車を伴う有力なる敵の部隊三  
 師団を南に迂回し五又溝方向に前進し日本軍才百七師団の退路を遮断  
 する状況となつた。同師団は十日軍命令に依り白阿線の隘道其の他主  
 要なる橋梁等を破壊しつゝ新京に後退せしめられた。師団は途中敵戦  
 車部隊と遭遇し又は行進交又を生じ大なる困難の下に後退した。  
 八月十日才三方面軍司令官は連京鉄道沿線にて敵と決戦を交うる目的  
 を以て各軍を同鉄道沿線に集結するに決し左の部署を採つた。

原	新配属兵団	転進目標	要
才三十軍	才百七師団 才百十七師団 独立戦車才九旅団	新京	才百三十八師団は開戦と同時に方面軍直轄となる
才四十四軍	才百八師団 才百三十六師団 独立混成才百三十旅団 戦車才一旅団	奉天	才四十四軍司令部、同軍直轄部隊及才六十三師団をも奉天に集結せしめる

才三方面軍は才百七師団以外は敵と交戦せずして終戦となる。  
終戦時に於ける才三方面軍の状況左の如し。

才三方面軍司令部

才三十軍司令部

才百四十八師団

独立混成才百三十三旅団

才三十九師団の歩兵一箇聯隊

才三十九師団一歩兵一箇聯隊(欠) 四平街

才百七師団

才百十七師団

才四十四軍の主力

才百八師団

新 京  
奉 天

白阿線北方地区を新京に向い行軍中  
一部新京、主力大賚東南方を新京に向い  
行軍中

奉天附近にて陣地構築中  
遼陽附近にて陣地構築中

其の四 才四軍(北正面) 作戦経過の概要

八月九日滿洲里正面及外蒙正面に於て未明よりソ軍機甲部隊は一齊に  
 國境を突破侵入し海拉爾方面に向い前進した。黒龍江方面に在りては  
 未だソ軍の渡河を見ず。

九月朝米敵機は海拉爾に対し爆撃を行い又齊々哈爾に対しては九日三  
 回の爆撃を行つた。

#### 一 滿洲里方面

滿洲里警備隊は師戦と同時にソ軍の攻撃を受け奮戦しつゝ多大の損  
 害を受けて海拉爾に後退した。獨立混成隊八十旅団は滿洲里及三河  
 方面より侵入した敵に対し海拉爾永久築城に據り眞面目なる戦斗を  
 交へた。

才百十九師団は師戦と同時に列車により海拉爾より大興安嶺陣地に  
 後退したが當方面の敵は八月十三日頃日本軍警戒陣地の前面に進出  
 し戦斗を交へた。

#### 二 黒龍江正面

ソ軍は九日夜有力なる一部を以て呼瑪及其の下流地区より十一日俄

の有力なる部隊を以て瑛瑛、勝武屯及奇克方面より黒龍江を渡河侵攻した。

勝武屯警戒隊は敵の渡河を妨害したが十四日優勢なる敵の攻撃を受け此の夜敵戦車部隊の為陣地を突破せられた。

才百二十三師団主力は孫吳北側の陣地を占領していた。勝武屯陣地を突破して孫吳飛行場に集結した敵は十五日同師団陣地南方に接触して来たが其の後停戦となり戦斗するに至らず。

瑛瑛方面に於ては十日夜黒龍江を渡河した敵の一部十一日夜瑛瑛の承久陣地に侵攻せんとし独立混成才百三十五旅団は之を撃退すると共に十二日より十四日迄連日西正面より攻撃して来た敵をも毎回撃退した。

瑛瑛方面の敵兵力は一箇師団、機甲一箇旅団よりなり主力は十六日瑛瑛陣地を力攻するとなく二站方面に突進したが日本軍は之を撃退した。

## 其の五 北鮮方面作戰經過の概要

八四

北鮮に於ては才三十四軍主力咸興附近に在つて陣地を占領し羅津には羅南師管区司令部があつて其の附近の警備を担当した。

八月九日ソ軍の一部雄基及羅津に上陸を開始し激戦を交へたる後日本軍利あらずして十一日には敵前進を開始した。

十三日正午頃ソ軍約六〇〇浦津港に上陸し羅南師管区防衛部隊は此の敵に対し攻勢を採つたが之を撃退するに至らざりしところ十四日夜半約一連師団の敵更に清津港に上陸した。此に於て師管区司令官は敵を攻撃中の各部隊をして攻撃開始前の陣地に歸還し防禦陣地を占領せしめた。

十五日終戦となる。

才三十四軍主力方面に於ては戦斗を惹起することなく終戦となつた。

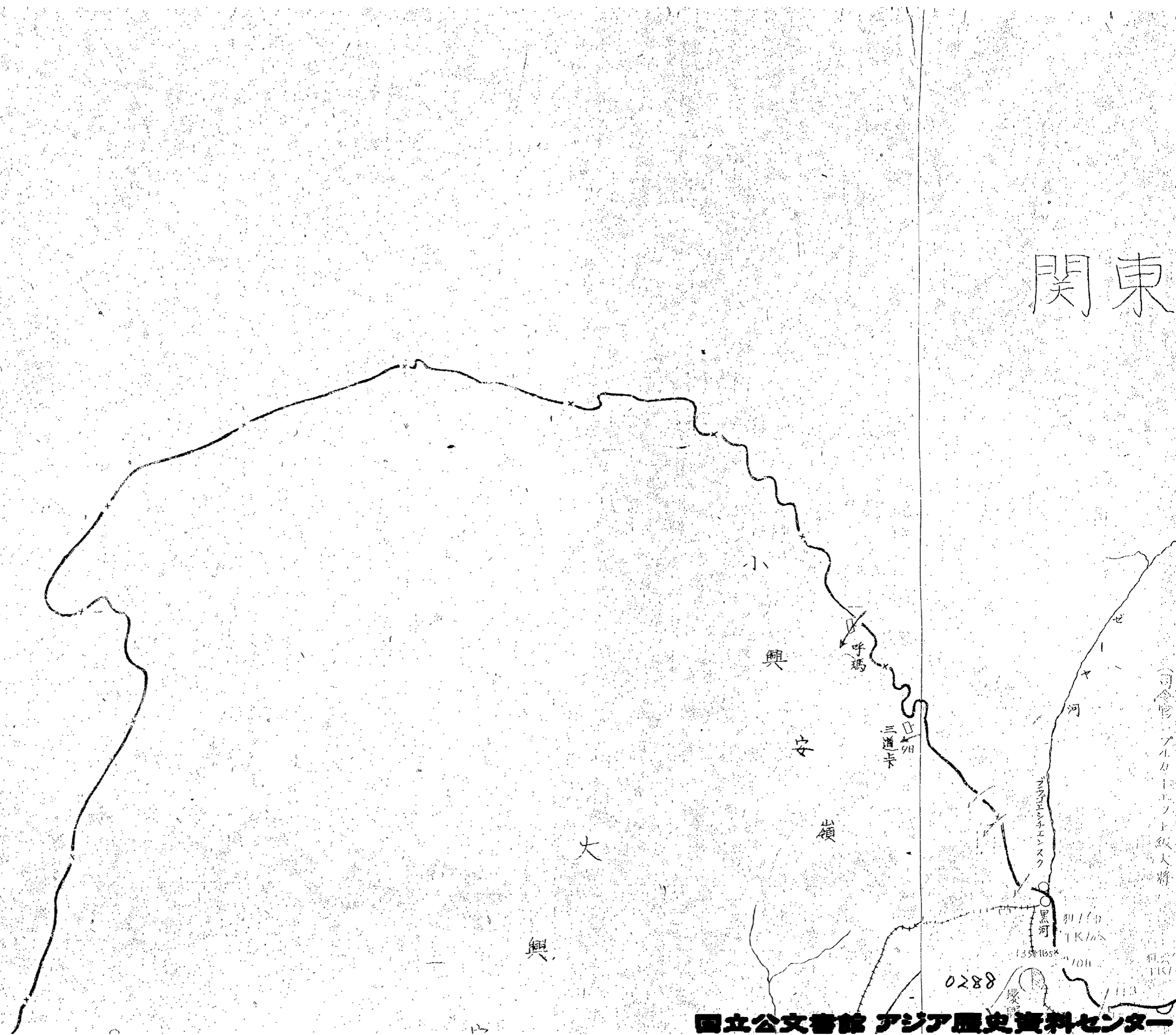
## 分割撮影ターゲット

分割した部分の撮影順序	<table border="1" data-bbox="726 582 1157 996"><tr><td>1</td><td>2</td></tr><tr><td>3</td><td>4</td></tr><tr><td>5</td><td>6</td></tr><tr><td>7</td><td>8</td></tr></table>	1	2	3	4	5	6	7	8
1	2								
3	4								
5	6								
7	8								
分割撮影した理由	A 3版以上のため								
文書等名	関東軍対蘇作戦経過要図								
上記のとおり分割撮影したことを証明する。									

0290  
0291  
0292  
0293  
0294  
0295  
0296  
0297

# 関東

ザバイカル方面取  
(司令官、マリノフスキ元帥)



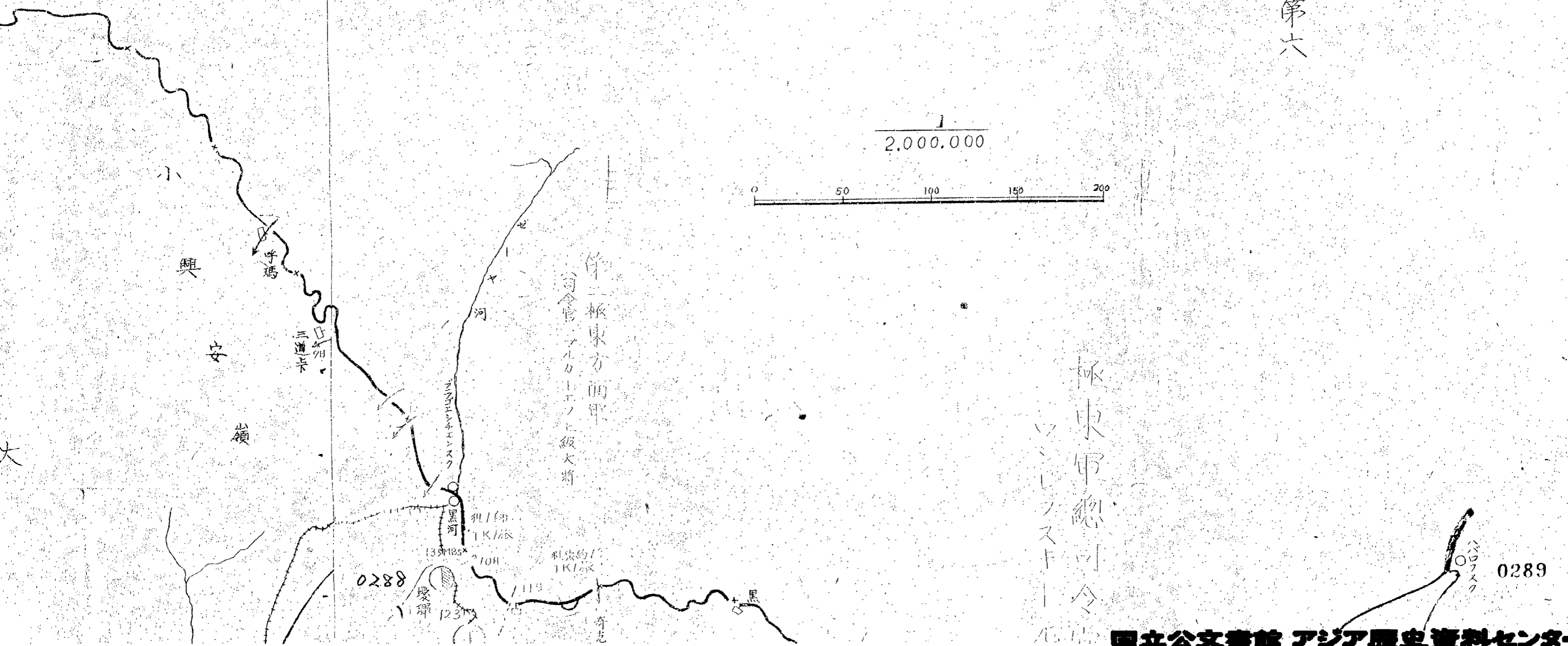
(司令官、ブエカトーエノト級大將)

0288

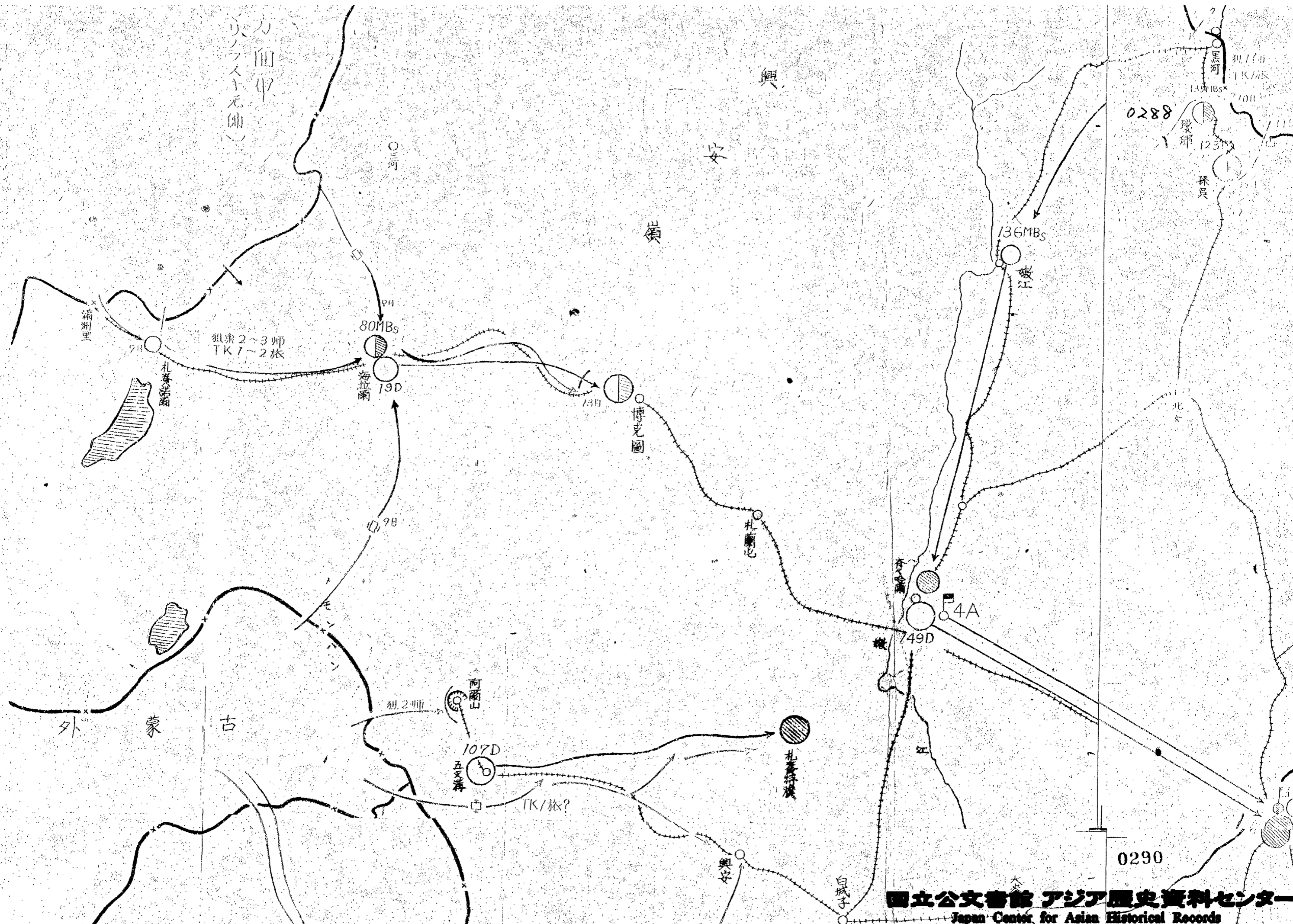


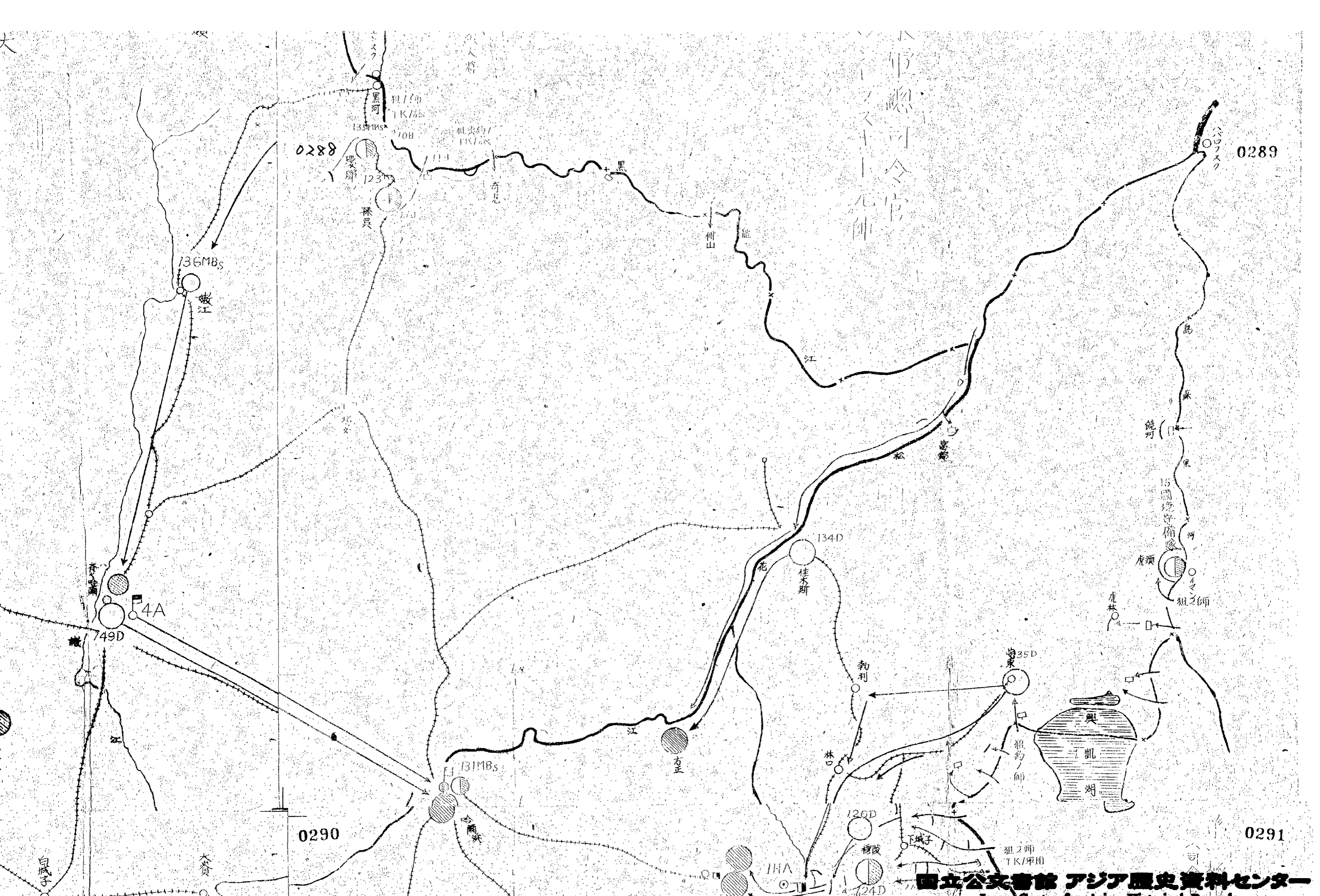
# 關東軍對蘇作戰經過要圖

挿圖第六

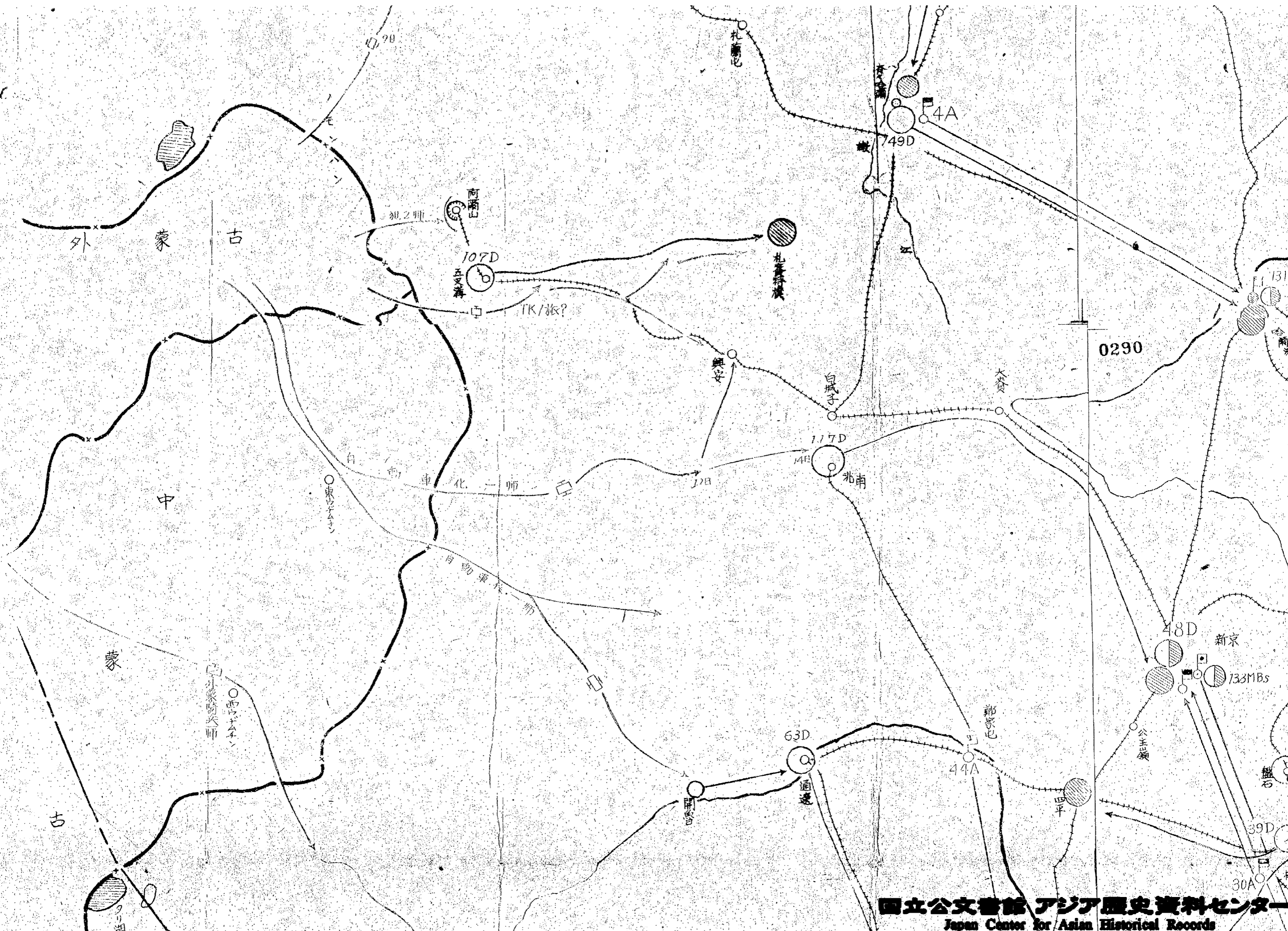


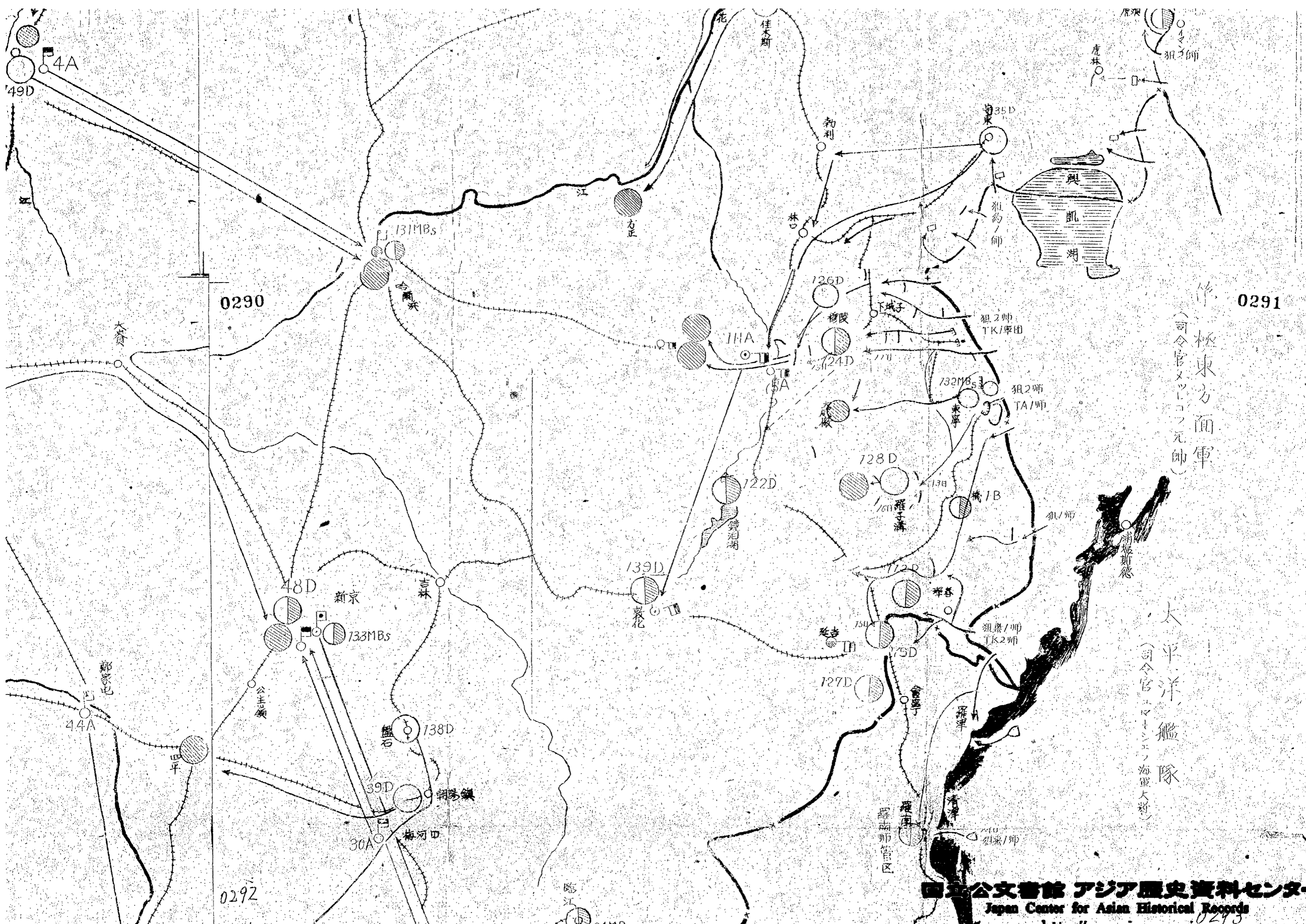
方面軍  
(ノース・ウエスト)





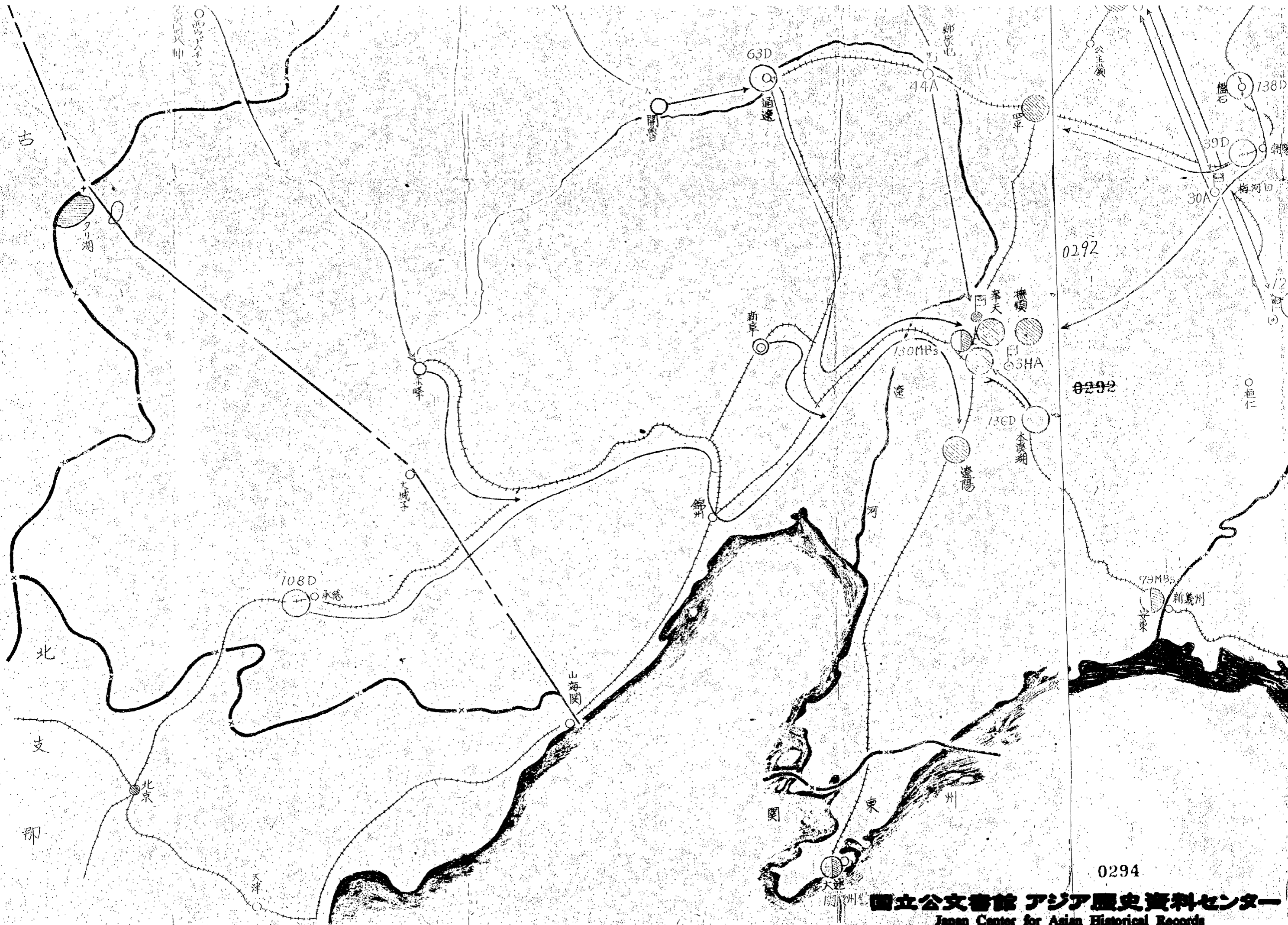
小菅總司令部  
シラス山元帥

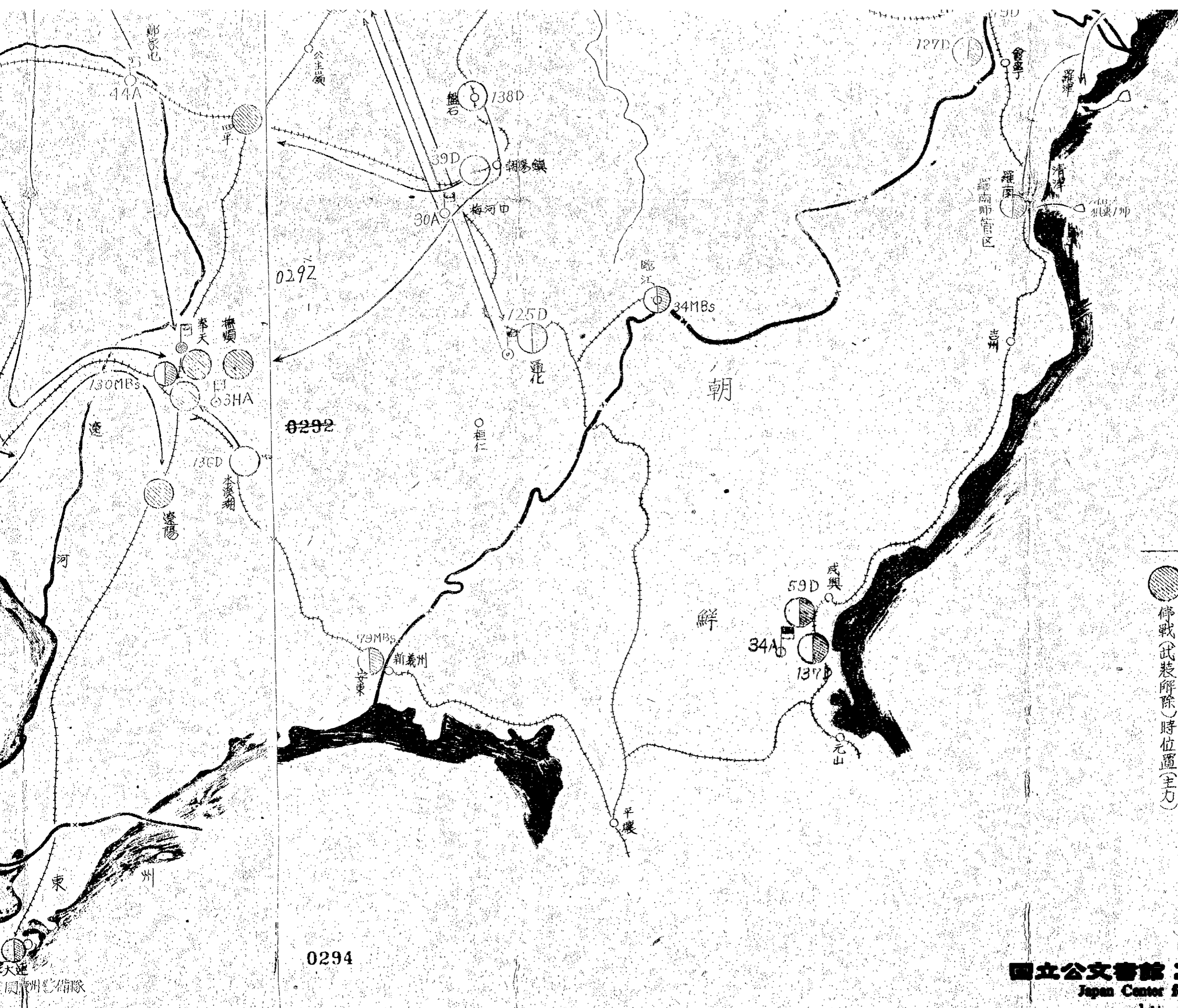




0291  
 極東方面軍  
 (司令官マツヒコ元帥)

太平洋艦隊  
 (司令官山本五十六海軍大将)





凡例

- 停戦(武装解除)時位置(主力)
- 開戦時位置